

国立天文台・天文情報センター・アーカイブ室 中桐正夫

### \*東京天文台が登場する小説「永遠のためいき（新田次郎）」

今回は、「東京天文台が登場する小説」ということで記事を書いている。アーカイブ室新聞第506号(2011年6月29日)に「東京天文台が登場する小説「金環食(松本清張)」」という記事を書いた。今回の「永遠のためいき」(新田次郎)に東京天文台が登場すると情報を寄せてくれたのは、アーカイブ室新聞の読者で、岡山天体物理観測所の65cmクーデ型太陽望遠鏡のマグネトグラフ、乗鞍コロナ観測所の25cmクーデ型コロナグラフで観測したことがあるという川上新吾氏である。この本もさっそく買い求めた。写真1が掲載されている「永遠のためいき」(新田次郎)である。



写真1 「永遠のためいき」の文庫本

この小説は、機械製作工場の老社長が私財で八ガ岳に天文台を建設し、天文台に寄付する企てのために天文台（東京天文台という名称は出て来ないが三鷹の天文台なので東京天文台のことだということは分かる）の奥さんを亡くした34歳くらいの天文学者が、手助けをするその老社長の会社の若者2人と観測条件の調査に八ガ岳に登山している際、若く美しい3人連れ女性に出会ったところから始まる。新田次郎は「強力伝」、「孤高の人」、「八甲田山死の彷徨」、「富士山頂」、「三つの峯」、「岩の顔」、「槍が岳開山」、「富士に死す」、「冬山の掟」、「怒る富士」などの山岳小説、あるいは山での遭難を扱った小説を書いている作家である。この小説も出会った若い美しい3人の女性の遭難を助ける

場面を初めとして、天文学者岡村たち3人の男と、3人の女性の複雑な絡みを交えて展開される人間模様、恋愛感情の小説である。

三鷹の天文台の様子、官舎の様子などが登場するように初めから終わりまでである意味では天文台が舞台に展開される本格的な小説である。今まで7件紹介した東京天文台が登場する作品と違って、この小説は八ヶ岳山頂に天文台を建設するために、観測条件を調査する調査隊を中心としたものであるから、まさしく東京天文台が舞台といっても過言ではない。

この八ヶ岳に天文台を建設の話が実際にあったかどうか筆者は知らない。初代台長寺尾寿の頃、一戸直蔵が台湾の玉山山頂に天文台建設を考え、現地調査をした話は事実であるし、この一戸直蔵は東京天文台の三鷹移転に反対し、赤城山山頂に移転すべきだと主張して寺尾寿台長に東京天文台を追われた人物である。

この小説のキーワードのように「シンチレーション」という言葉がたびたび登場する。この「シンチレーション（星の瞬き具合）」という言葉は、天文用語で一般には何を意味するか分からないであろう。

一気に読ませる小説ではあった。この小説の主人公の一人、岡村という天文学者のモデルがいたという話を知っている人がいたら情報を得たいと思う。

これらアーカイブ室新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、[arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp](mailto:arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp)